

乳熱（分娩性の低カルシウム血症）の仕組みを知って対策を立てよう！

乳熱とは、牛の血液中のカルシウムが不足することで筋力低下・起立不能（腰ぬけ）・食欲不振、ついにこん睡に至る分娩後の疾病です。これにより、廃用や生産性の低下、治療費の増加や疾病牛管理の労働が増加します。



乳熱の牛

○地域の現状  
 釧路管内弟子屈町のA地区ではH26年の疾病割合（診療頭数・分娩頭数）が、乳熱8%、ケトーシス7%、第四胃変位は6%でした。ニューヨーク州のガイドラインによると、乳熱が5%以上で要改

善となつていられるため、この地区では乳熱対策が必要となつていきます（表1）。

表1 釧路管内弟子屈町A地区の疾病割合

	A地区平均	ガイドライン	
	H26	目標値	警告
乳熱	8%	2%未満	5%以上
ケトーシス	7%	3%未満	8%以上
第四胃変位	6%	3%未満	6%以上

参考：NYSCHAP（ニューヨーク州牛健康プログラム）より

警告（要改善）

○乾乳管理での予防策  
 分娩前後の牛への環境の変わらぬこと。他の疾病として記録されないことを考えなければならぬ。ケトーシスや第四胃変位など誘発し、他の疾病として記録されないが乳熱の原因で、ケトーシスや第四胃変位など誘発し、他の疾病として記録されないことを考えなければならぬ。

乳熱の防止技術～カルシウムとリン管理～

＜搾乳期～乾乳前期＞

・エサ：カルシウム（例：飼料用タンカル 50～100g）を給与し、骨にカルシウムを蓄積！特に3産以上

＜乾乳後期＞

・エサ：マメ科を含まない1番草の乾草または低水分のラップサイレージを飽食させる！分娩3週間前から、カルシウムを制限する（Ca/P比を0.85に）。乾乳用配合の給与。

・施設：母牛が自由に動き、寝返りがうてるスペースを確保する。



乾乳前期の炭カル給与の事例

化や過密ストレスの少ない管理ももちろんですが、今回は牛の乾乳期での2群分けによるカルシウム管理をおすすめします！  
 ・2群でのカルシウム管理  
 左に具体的な乳熱の防止技術を記載しました。  
 乳熱は、分娩後の急激なカルシウム要求量の増加に、消化管や血中からの供給が追いつかないときに発生します。そのため、応急的に骨からカルシウムを動員させ、乳熱を回避します。  
 原理としては、分娩前3週間に血中のカルシウム濃度を

低レベルにし、ホルモンの活性を促します。これにより、骨から血中へカルシウムの移動を促進します。分娩前に血中カルシウムが高レベルで分娩すると、ホルモンが稼働しないため骨からのカルシウム移動が遅れ、乳熱が発生します。  
 注意点としては、骨にカルシウムの蓄積が少ない場合も、乳熱が発生することがあるので、泌乳・乾乳前期までの十分なカルシウム給与が必要で